

峯

ミといふは、ミネのミの字に同じ、舊事紀、日本紀には、共に峯の字を用ひて、タケと讀まれし也。
〔倭訓栞前編十四〕たけ、神代紀に峯をよめり、高き義、よて万萬集に高とも多氣とも書り、たをに

こりてよみならへるは、いつの比よりの事なりしにや、伊勢神宮の邊に、朝熊がだけを略して、常
にたげと稱し、清く唱ふ、契沖も元亨釋書を引て、嶽と竹とを聞あやまりし事をいへり、

〔八雲御抄五〕いこまのたけには、大神さふるした、よし、同新古、賴政、ゆつきか、同万、あさ
まの信、新業平

〔倭名類聚抄山谷〕峯、祝尙丘曰、峯敷容反、和名三禰又用下二字、岑音尋、嶺音領、山尖高處也、

〔箋注倭名類聚抄山石〕新撰字鏡、曉訓彌禰、按美者褒稱、禰謂高峻、所謂高禰、筑波根、富士乃禰、甲斐
加禰是也、按峯山崑也、見說文、新修字義、山高而小岑、見爾雅、說文亦云、岑山小而高、釋名、岑、嶺也、嶺

嶺然也、峯岑雖不同、然並可訓美禰、嶺山道也、見說文、新附、古無嶺字、皆用領字、列子湯問篇終、北國
中有山曰壺領、漢書嚴助傳、輿轎而隄領、注、項昭曰、領山嶺也、蓋山可道之處、其狀如人領、後人從山

以別領頸字、則嶺宜訓多牟計、今俗譌呼多字、偈是也、以嶺爲美禰、非是、景行紀、嶺訓多計、亦非、山田
本岑音尋、嶺音領、作音尋領三字、中祝尙丘增加切韻字、見廣韻、卷首、見在書目錄云、切韻五卷、祝

尙丘撰、今無傳本、按玉篇云、峯高尖山、卽此義、
〔段注說文解字山下〕岑、山小而高、釋名曰、山小而高曰岑、从山今聲、鈕鏡切

〔新撰字鏡〕曉、牛消反、山高危峻之貌、太嶼、因乎反、上山豐貌、利乃彌禰、〔同連字〕爰、嶽、山頭也、山高
伊太、則男、山峻嶼之貌、佐曉、山木安之貌、又作加岑、山高之貌、又不齊岑、岑居陰

〔類聚名義抄〕山、岑、音尋、仁、兪反、峯、音蜂、フウ、ホラ
〔伊呂波字類抄〕見、峯、山也、嶮、山頂嶽也、岑、山尖而高也、

〔和漢三才圖會〕五十六、峯、音風、岑、音尋、嶮、音嵩、和名三禰、嶺、音顛、和名以太々木